ユニット型特別養護老人ホームにおけるスタッフの介護様態に関する研究
～従来型施設との比較を通してみた考察～

キーワード：ユニットケア， 介護行為， 空間利用，
動線， 拠点ユニット， 夜勤介護

石井研究室　斎藤　祐
佐久間　大作
山崎　泰敬

1. 研究の背景と目的

従来型の特別養護老人ホームは、基本的には大部屋における「集団処遇」が基本であった。それが、生活モデルに立脚したサービスの「質」が問われるようになってきたこと等を踏まえ、1990年には、個室化、段階的な空間構成などといった試みが相次ぎ、ユニット型特別養護老人ホームが2003年より制度化された。また現在では、ユニット型特別養護老人ホームにおけるスタッフの介護様態の研究が進み、様々な面で実態が明らかにされてきている。

しかし、夜間の介護様態に着目すると、ほとんど解明されていないのが現状である。昼間と夜間では、スタッフの介護体制が変わり、ユニット単位での介護体制から、複数のユニットを単位としての体制に変わるなどの特徴がある。

そこで、本研究では、①ユニット型特養と従来型特養における介護様態の違いの分析、②日勤と夜勤のスタッフの介護様態の分析を通して、介護行為と空間利用の実態と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

調査対象の施設は、従来型特別養護老人ホームの施設Ｍと、ユニット型特別養護老人ホームの施設Ｈと施設Ｓの3施設である。これらの施設を比較対象とすることにより、特養の従来型とユニット型、また、日勤・夜勤スタッフの勤務時間帯別における介護行為との実態を明らかにする。日勤介護の分析では、特養の従来型施設Ｍとユニット型施設Ｈの2施設で調査を行った。夜勤介護の分析では特養の従来型施設Ｍとユニット型施設Ｈと施設Ｓで調査を行った。

調査は、調査対象日に調査対象ユニットに勤務する全介護スタッフを対象とし、1分毎の行為と場所を記録する方法をとった。各施設のユニットの数、スタッフの人数、調査時間帯は異なる。各施設の調査の詳細は〈表1〉の通りである。

3. 調査対象施設の概要

施設Ｍは、平成11年3月に完成した特別養護老人ホームである。入居者130人、ショートステイ20人で構成される従来型の特養である。1フロアに4ユニットがあり、日勤は各ユニットに担当のスタッフが配置されている。夜勤時は、4ユニットを2人のスタッフでみる。また、スタッフ室がユニット外に設けられている。

施設Ｈは、平成19年5月に開設されたユニット型特別養護老人ホームである。これは、施設Ｍと同じ社会福祉法人が運営している。入居者60人、ショートステイ30人からなる。1フロアに2ユニットあり、日勤は各ユニットに担当のスタッフが配置されており、夜勤時は、2ユニットを1人のスタッフでみる。また、スタッフ室は設けられておらず、ユニット内で記録等の業務を行っている。

施設Ｓは、4階建てのユニット型特別養護老人ホームである。入居者100人、ショートステイ20人からなる。2つのユニットでスタッフ室を共有する空間構成となっている。

〈表１〉施設別調査の詳細

施設	調査日	ユニット数	調査スタッフ人数	スタッフ1人あたりの介護人数	スタッフ1人あたりの介護人数（ショートステイ）	日勤調査	夜勤調査
施設M	2007/10/29	4	6人	15人	－	7:00～20:30	－
	2007/10/30	4	2人	50人(2人で)	－	－	17:00～翌10:00
施設H	2007/11/23	2	6人	10人	－	7:00～21:00	－
	2007/10/22	2	1人	20人	－	－	22:00～翌7:00
施設S	2007/12/7	3	3人	25人	10人	－	22:00～翌7:00
	2007/12/8	3	3人	25人	10人	－	22:00～翌7:00

4. 日勤の介護行為に関する比較考察（施設ＭとＨ）

日勤スタッフの介護行為を分析し、その行為別に割合をみたものが〈表2〉と〈図1〉である。

2つの施設は、同一の理念に基づき同一の社会福祉法人により運営されているが、施設の規模や形状、様式が異なるため介護行為に違いが見られた。

施設Ｈには、スタッフができる限り入居者のそばで業務を行うという視点からスタッフ室が設けられておらず、リビングの隅の空間を利用して記録などを行っている。記録などは勤務時間後に行われる。そのため、生活サポートの割合が施設Ｍの27%に対して、施設Ｈは36%と違いが現れている。

ユニット外にスタッフ室が設けられている施設Ｍでは、ポータブルPCを携帯し、その場で逐次記録を行うことができる。そのため、直接事務の割合が施設Ｈの4%に対して14%と非常に高い。

スタッフ別にみると、施設ＭのＡさんは直接事務34%、間接事務33%と他のスタッフの割合に比べて高い割合を示している。これは、Ａさんが1Fのフロアリーダーのため、夜勤のシフト調整や関係機関との打ち合わせなどを行なっているためである。また、Ｋさんも2Fのフロアリーダーのため、同様に直接事務17%、間接事務13%と高い割合を示している。上記2人以外のスタッフは、基本介護と生活サポートの割合が6割前後と高

くなっている。

施設Hの各ユニット・スタッフ別のデータを見てみると、それぞれ特徴的な傾向がみられる。ユニット内での業務の役割分担が明確になっている。

Aユニットを例にあげると、Hさんは基本介護42%、Oさんは生活サポート52%、Sさんは入浴（基本介護）12%、環境整備19%と、これらの割合が他のスタッフに比べ、高い割合を示す。しかし、ユニット別でみると、ABとも同様の傾向を示す。

5. 夜勤の介護行為に関する比較考察（施設M、H、S）

3施設における夜勤スタッフの介護行為の割合を〈表3〉、〈図2〉に示す。夜勤では日勤と介護体制も変わるため、介護行為の内容に違いが出てくる。

施設Mはフロア面積が広く、さらにスタッフ2人で4つのユニットを見て回るため、移動の割合が高くなっている。施設Hが0%、施設Sが1%なのに比べ、施設Mでは5%である。

また、施設Mは生活サポートの割合が他施設に比べて13%と低い。これは入居者の様態にもよるが、移動に時間を割かれてしまっている結果と考えられる。

施設Mのスタッフ別に寄り添い・会話（生活サポート）の割合をみると、Rさんが18%、Wさんが3%と違いが見られた。これは、Rさんは徘徊していた入居者の話相手をしていたためである。このように、その日の入居者全体の状況によっても介護行為の内容に違いが現れる。

時間帯別にみてみると、夜勤時は各施設においてそれぞれある程度決まった時間にオムツ交換、巡視といった介護行為が行われていることがわかった。

また、「その他の基本介護」の割合は4時～6時が各施設とも最も高い。これは入居者の起床の時間にあたり、着替えや洗顔などといった清潔保持が行われるためである。

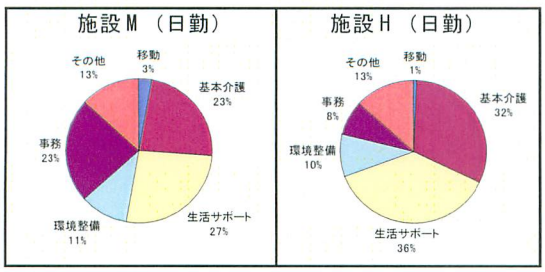
施設Sではショートステイ単独のユニットが設けられている。調査時は、自立度の高い入居者が多かったため、ショートステイを担当していたNさんとYさんの基本介護の割合はそれぞれ4%と6%と極めて低く、その分直接事務などを行う時間が多くなっている。

〈表2〉日勤スタッフの介護行為の割合

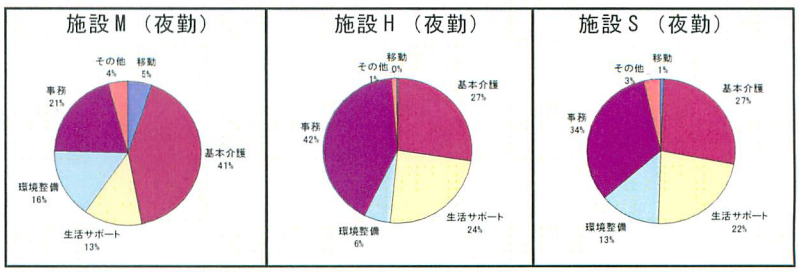
	施設M										施設H								
	1Bユニット				2Bユニット		2Cユニット				Aユニット				Bユニット				
	Aさん	Mさん	Sさん	総計	Kさん	総計	Nさん	Wさん	総計	施設M	Hさん	Oさん	Sさん	総計	Dさん	Jさん	Nさん	総計	施設H
移動	8%	1%	0%	3%	1%	1%	6%	1%	4%	3%	0%	0%	1%	0%	1%	1%	1%	1%	1%
食事(基本介護)	0%	5%	6%	4%	4%	4%	7%	3%	5%	4%	17%	7%	0%	8%	8%	2%	5%	5%	6%
排泄(基本介護)	1%	10%	10%	7%	7%	7%	15%	16%	15%	10%	14%	10%	7%	11%	11%	5%	12%	10%	10%
入浴(基本介護)	0%	6%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	12%	4%	1%	13%	7%	7%	5%
その他の基本介護	4%	8%	7%	7%	3%	3%	11%	14%	13%	8%	11%	8%	10%	10%	10%	5%	15%	10%	10%
健康管理	1%	3%	1%	2%	4%	4%	2%	2%	2%	2%	2%	2%	0%	2%	5%	4%	3%	4%	3%
食事(生活サポート)	0%	12%	17%	10%	9%	9%	13%	14%	14%	11%	12%	26%	11%	16%	12%	29%	13%	18%	17%
寄り添い・会話(生活サポート)	3%	14%	16%	11%	14%	14%	11%	13%	12%	12%	16%	23%	19%	19%	19%	9%	14%	14%	17%
その他の生活サポート	1%	2%	3%	2%	3%	3%	10%	5%	7%	4%	6%	4%	2%	4%	4%	1%	3%	3%	3%
環境整備	3%	12%	11%	9%	14%	14%	7%	16%	12%	11%	3%	2%	19%	8%	9%	14%	12%	11%	10%
物品管理	3%	1%	2%	2%	1%	1%	0%	0%	0%	1%	0%	1%	0%	0%	0%	1%	1%	1%	1%
直接事務	34%	11%	10%	19%	17%	17%	7%	2%	5%	14%	4%	4%	2%	3%	10%	1%	3%	4%	4%
間接事務	33%	5%	5%	14%	13%	13%	1%	1%	1%	10%	6%	3%	6%	5%	0%	6%	2%	3%	4%
その他	9%	9%	11%	10%	11%	11%	9%	12%	11%	10%	9%	11%	11%	10%	10%	10%	10%	10%	10%

〈表3〉夜勤スタッフの介護行為の割合

	施設M						施設H					施設S									
	スタッフ別			時間帯			スタッフ		時間帯			スタッフ別							時間帯		
	Rさん	Wさん	施設M	22～0	1～3	4～6	Sさん	施設H	22～0	1～3	4～6	Fさん	Hさん	Iさん	Mさん	Yさん	Nさん	施設S	22～0	1～3	4～6
移動	2%	9%	5%	7%	8%	3%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%
食事(基本介護)	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	1%	1%	1%	0%	0%	1%	0%	1%	1%
排泄(基本介護)	20%	30%	25%	30%	7%	29%	14%	14%	19%	11%	11%	27%	30%	27%	33%	4%	2%	21%	14%	24%	24%
入浴(基本介護)	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
その他の基本介護	19%	14%	17%	15%	15%	19%	13%	13%	11%	8%	21%	15%	8%	3%	6%	2%	2%	6%	4%	4%	10%
健康管理	1%	0%	0%	1%	0%	1%	0%	0%	1%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
食事(生活サポート)	0%	1%	1%	1%	1%	0%	1%	1%	0%	0%	4%	4%	5%	4%	3%	6%	9%	5%	4%	4%	8%
寄り添い・会話(生活サポート)	18%	3%	10%	8%	19%	8%	21%	21%	23%	25%	13%	8%	20%	28%	17%	17%	11%	17%	21%	14%	16%
その他の生活サポート	1%	2%	2%	2%	1%	2%	2%	2%	1%	2%	4%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%
環境整備	19%	12%	16%	20%	14%	12%	6%	6%	13%	0%	4%	12%	7%	10%	15%	19%	15%	13%	16%	12%	11%
物品管理	0%	5%	3%	1%	10%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	1%	1%	1%	0%	0%
直接事務	14%	14%	14%	16%	24%	7%	37%	37%	17%	53%	42%	29%	25%	16%	16%	41%	53%	30%	30%	37%	24%
間接事務	6%	7%	7%	0%	2%	16%	5%	5%	14%	0%	0%	0%	0%	6%	4%	4%	3%	3%	5%	2%	2%
その他	0%	2%	1%	0%	0%	3%	1%	1%	1%	1%	0%	3%	3%	4%	5%	5%	3%	3%	3%	3%	2%



〈図1〉日勤の施設別にみた介護行為の割合



〈図2〉夜勤の施設別にみた介護行為の割合

6. 日勤スタッフの空間利用に関する考察（施設MとH）

6-1. 施設別に見た比較考察

日勤スタッフの空間利用の割合を〈表4〉に示す。ユニット内で過ごす割合は施設Mが57%、施設Hが70%となっている。これは、施設Mではスタッフ室がユニット外に設けられているためと、汚物処理室や浴室がユニット外にあるためである。

施設Hでは、記録作業も休憩もユニット内のリビングで行うため、より入居者とかかわる時間が多くなっている。また居室の利用割合が施設Mでは19%、施設Hでは26%と差が出ている。これは施設Hでは居室にトイレがついており、そこでの介助が行われているためだと考えられる。

6-2. スタッフ別に見た比較考察

施設Mではユニットリーダーとその他のスタッフでは、空間利用の割合に大きな違いがあることが明らかになった。リーダーであるAさん、Kさんはスタッフ室にいる割合が高く、担当ユニット以外に行く機会も多い。その他のスタッフは居室で介護行為を行ったり、ユニット内での生活サポートが中心となっている。ユニット別に見ると1Bユニット内でも居室介護担当のSさんと、入浴介助担当のMさんがいるように、役割分担をしながら勤務していることがわかった。

施設Hでは早番(7:00-16:00)のスタッフとそれ以外のスタッフで、空間利用の割合に違いが出ることが分かった。早番のスタッフは朝の声掛けや着替え、洗面介助のために居室に滞在する割合が高くなっている。また施設Hではスタッフがユニット外にいることが少ない。Dさんは行事の付き添いでユニット外に行くことがあったが、特浴の介助やイベントがない限り、Hさん(79%)やOさん(81%)のように勤務時間のほとんどをユニット内で過ごす。

7. 夜勤スタッフの空間利用に関する考察（施設M、H、S）

夜勤スタッフの施設別・スタッフ別の空間利用の割合を〈表5〉に示す。

まず施設Mはスタッフ室を拠点に、定時の見回りやナースコールで居室を回っているため、ユニット内にいる割合が19%と低い。スタッフ別にみると、2人のスタッフの空間利用にはユニットでの違いはあるが、各ユニットほぼ同じ割合で滞在していることが明らかになった。ただスタッフ別にみると滞在ユニットに偏りはある。〈図3左〉は施設MはRさんのグラフだが、これを見ると居室28%、ユニット内14%と、共に2Aユニットの割合が高くなっている。Rさんはスタッフ室を拠点にAユニットを中心に定時の見回りを行っていたためこの様な結果になった。

施設Sは、ユニット間にあるスタッフ室が拠点になっているので、施設Mと同様な結果になっている。スタッフ別にみると、ショートステイのユニットにはスタッフ室がないため、ユニット内に滞在する割合がNさん（70%）、Yさん（66%）は高くなっている。その他ユニットのスタッフ間では大きな違いは見られなかった。〈図3中〉の施設SのグラフはFさんのものだが、ユニット別に見るとDユニットでの滞在割合がやや高くなっている。これは入居者の平均要介護度がCユニット3.5、Dユニット4.2とDユニットの方が高いためである。

施設Hは他の2施設と異なり、スタッフ室がなく、ユニット内に拠点を置いている。そのため、ユニット内での滞在が68%と高い割合を占めす。ただし、ユニット別での滞在はAユニットにその滞在は偏っている。拠点としているユニットと他方のユニットとでの滞在割合に大きな差が出る結果となっている〈図3右〉。

8. スタッフの動線に関する分析

各施設ごとに夜勤スタッフの動線を、22時～翌7時の時間帯で分析し、通った場所の頻度を線の太さで表した。また、居室内の数字は利用者の要介護度である。

施設Mでは、拠点となるスタッフ室から長い廊下を通り、各ユニットへ向かう動線となっている〈図4〉。

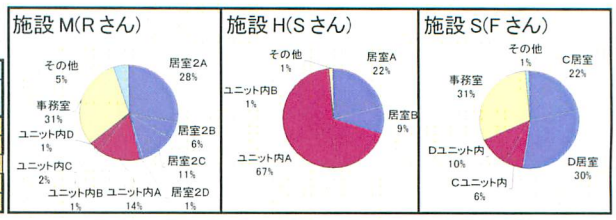
施設Hでは、特定の居室への動線は、廊下ではなく、拠点となるリビングからダイニングへ抜け、居室を訪れる動線となった〈図5〉。

〈表4〉日勤スタッフの空間利用

	施設M										施設H								
	スタッフ別			スタッフ			スタッフ別				スタッフ別				スタッフ別				
	Aさん	Mさん	Sさん	ユニット1B	Kさん	ユニット2B	Nさん	Wさん	ユニット2C	総計	Hさん	Oさん	Sさん	ユニットA	Dさん	Jさん	Nさん	ユニットB	総計
居室	14%	14%	27%	18%	17%	17%	22%	17%	20%	*19%*	21%	19%	28%	23%	26%	27%	35%	30%	*26%*
ユニット内	38%	63%	58%	53%	49%	49%	70%	62%	66%	*57%*	*79%*	*81%*	68%	76%	61%	71%	62%	64%	*70%*
事務室	32%	9%	11%	17%	26%	26%	6%	11%	8%	16%	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	16%	14%	4%	11%	8%	8%	2%	10%	6%	9%	0%	0%	4%	1%	13%	2%	3%	6%	4%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

〈表5〉夜勤スタッフの空間利用

	施設M			施設H		施設S								
	スタッフ別			スタッフ		スタッフ別					スタッフ別			
	Rさん	Wさん	総計	Sさん	総計	Fさん	Hさん	Iさん	Mさん	特養	Nさん	Yさん	ショート	総計
居室	46%	45%	45%	31%	31%	52%	51%	56%	54%	53%	20%	26%	23%	43%
ユニット内	19%	18%	*19%*	68%	*68%*	16%	19%	12%	14%	15%	*70%*	*66%*	68%	33%
事務室	30%	33%	32%	—	—	31%	29%	32%	32%	31%	1%	1%	1%	21%
その他	5%	4%	4%	1%	1%	1%	1%	0%	0%	1%	9%	7%	8%	3%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%



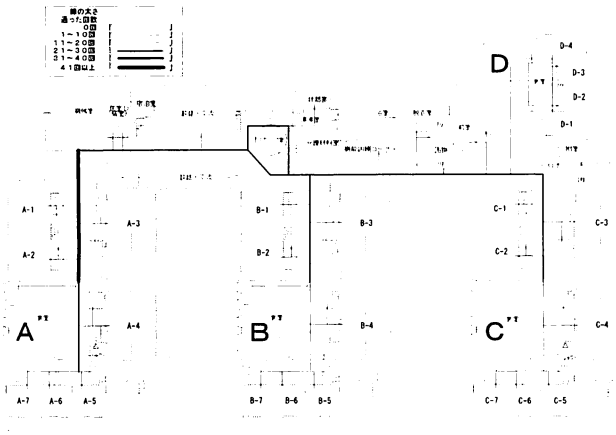
〈図3〉夜勤スタッフのユニット別空間利用

施設Sでは、拠点となるスタッフ室がユニットを繋ぐ通路としても使われていることが特徴的である〈図6〉。

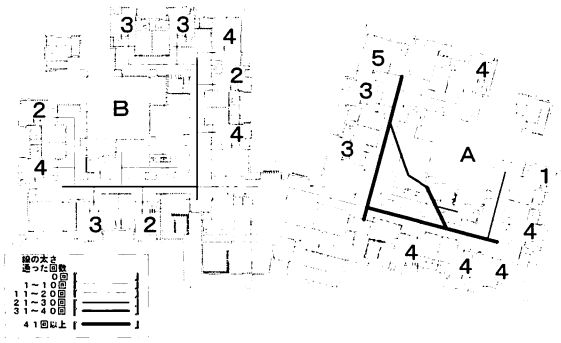
次に、施設別にスタッフの移動距離について比較してみると、施設MではRさんが約430 m、施設HでSさんが約300 m、施設SではFさんが260 mだった。

これらの結果より、施設Mの移動距離が他の施設より長いことが示された。要因としては、他の施設より施設全体の空間が大きいことと、各ユニット間の距離が長いことが挙げられる。移動の割合をみても、3つの施設の中で施設Mが最も高い割合を示している。

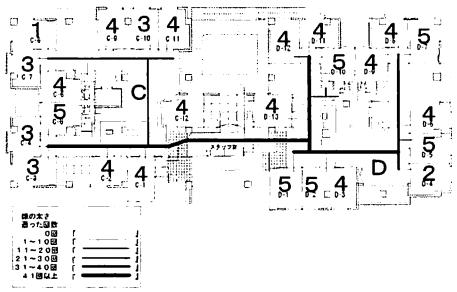
以上のことにより、3つの施設ともリビングやスタッフ室を起点とし、各ユニットを巡回し介護を行っていることがわかった。また、施設ごとの動線は、空間の大きさ、拠点となる空間がどの場所にあるかにより変わってくることが明らかになった。



〈図4〉施設M　スタッフの動線



〈図5〉施設H　スタッフの動線



〈図6〉施設S　スタッフの動線

9. 結論

日勤時におけるスタッフの介護行為を比較してみると、従来型の施設Mとユニット型の施設Hでは、入居者と会話をしたり、見守りをする割合に差がでた。また、生活サポートの割合も、施設Hが高くなっている。ユニット型、ユニットケアであることの特徴が現れているといえる。

スタッフの空間利用の様態をみても、その違いは明らかである。ユニット型の施設Hには、スタッフ室がないためスタッフは常に2ユニット内にいて、入居者の目の届く範囲で会話を交わしながら仕事をしていることが明らかになった。

それに対し従来型の施設M では、スタッフ室が2ユニット外に設けられているため、そこで作業をする時間が多くなっている。以上のことから、従来型とユニット型の施設では、入居者と共にいる時間に大きな差が生まれることになる。

夜間時の介護では、2ユニット(約20人程度)を1人のスタッフで担当することになる。その介護の内容は日中のものとは異なり、定時の巡視や排泄、体位交換が中心となる。〈表2〉と〈表3〉の介護行為の割合の表を比較してみてもその違いは明らかである。

空間利用の点からみると、滞在する空間はスタッフ室や居室が多く、日中のようにキッチンやダイニングで過ごす時間はほとんどない。

夜間時は少ないスタッフで多くの入居者を見なければならず、介護における効率性が求められ、空間構成のあり方もそこに関わってくるであろうことが確認できた。

また、施設ごとにその実態を見ていくと、従来型の施設Mはその規模の大きさから移動に割かれる時間が多くなっている。従来型施設の空間構成が持つ1つの特徴でもある。

施設Hではスタッフ室を設けていないため、スタッフがどちらかのユニットを拠点としなければならない。これはユニット間でのケア量にばらつきが生じるし、移動距離から見ても効率的ではない。他ユニットで徘徊している入居者がいても気付きにくいなどの課題がある。

施設Sは2ユニットを繋ぐ形でスタッフ室があるため、両ユニット均等にケアを行うことができる。ただ、ユニット内にいる場合とは異なり入居者と多少の距離が生じるため、適宜ユニット内の状況に意識をおいていると様々な入居者の状況に対応しにくいという点も課題としてある。このようにスタッフ室の有無によっても滞在の様態が異なることが明らかになった。

謝辞：調査にご協力いただいた施設およびスタッフ、入居者の皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。